The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「宮仕へ」する昔男 : 『伊勢物語』における機能
Author(s)	木下, 美佳
Citation	詞林. 2006, 40, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67554
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「宮仕へ」する昔男

――『伊勢物語』における機能――

木下　美佳

はじめに

旧稿[1]では、「泣く」ということを手がかりとして、個々の章段の主題とのかかわりから物語構造を分析した。その結果、失ってしまった過去を望んでも戻らないと実感した時に、男は激しく泣く、という共通した物語構造が確認できた。この結果をもとに、もう一度、激しく泣く姿で閉じられる章段を見直してみる。すると、男が望む関係の存続が阻まれる理由としては、女が男の行けない場所へ移ったこと（四段）、鬼に喰われる（六段）、男の親が女を追い出す（四十一段）など様々な要因があるものの、男の側に理由がある場合には、「狩の使」（六十九段）、「公事」（八十三段）、「宮仕へ」（八十四段）があり、いずれも「公務」として括ることができることに気づかされる。[2]

『伊勢物語』の中には、「宮仕へ」という語がいくつかの章段において見られ、[3]それについての考察もおこなわれている。竹岡正夫氏は、「伊勢物語中、男の宮仕えの例は「宮仕へ忙しく」（六〇段）、「宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず」（八四段）、「おほやけの宮仕へしければ、常に仕へまうでず」（八五段）とあって、いずれも、宮仕えのために母や主君に心ならずも御無沙汰したり、妻をも愛する余裕もない、余儀なきものとして物語られている。」と指摘されている。[4]また、今西祐一郎氏は、「（前略）「宮仕へ」と恋とが相克し、しかも「宮仕へ」を放擲できないという状況に「男」を置こうとする物語の意図らしきものが感じられるのである。」と、男の「宮仕へ」が障害として機能していることを考察されている。[5]両氏の指摘はもっともであるが、しかしながら、同じ「宮仕へ」という語であっても、主題との関わり方によって機能の程度には違いがみられるのではなかろうか。

本稿の目的は、「宮仕へ」の語がどのような機能を果たしているのか、また、個々の章段の主題との関わりの中でどのように関わってくるのか見定め、その機能を分類・整理し直すことにある。『伊勢物語』に頻出する語を見直すことに

よって、『伊勢物語』の新たな側面が見えるのではないか、と考えている。

一、昔男が激しく泣く章段における「公務」
―六十九段・八十三段・八十四段―

まず、旧稿で扱った章段のうち、男が望んでも、それを阻むものが男の公務にある場合の章段を検討していくこととする。

左記に挙げるのは、狩の使章段として有名な六十九段である。まず、前半部のみを見ていくこととする。

むかし、男ありけり。その男、伊勢の国に狩の使に行きけるに、かの伊勢の斎宮なりける人の親、「常の使よりは、この人、よくいたはれ」といひやりければ、親のことなりければ、いとねむごろにいたはりけり。朝には狩にいだし立ててやり、夕さりはかへりつつそこに来させけり。かくてねむごろにいたづきけり。二日といふ夜、男、「われて逢はむ」といふ。女もはた、いと逢はじとも思へらず。されど人目しげければえ逢はず。使実とある人なれば、遠くも宿さず。女の閨近くありければ、女、人をしづめて、子一つばかりに、男のもとに来たりけり。男はた、寝られざりければ、外のかたを見出して臥せるに、月のおぼろなるに、小さき童を先に立てて人たてり。男、いとうれしくて、我が寝る所に率ていりて、子一つより丑三つまであるに、まだ何ごとも語らはぬに、かへりにけり。①男、いとかなしくて、寝ずなりにけり。つとめて、②いぶかしけれど、わが人をやるべきにしあらねば、③いと心もとなくて待ちをれば、明けはなれてしばしあるに、女のもとより、言葉はなくて、

君や来し我や行きけむおもほえず夢かうつつか寝てかさめてか

男、いといたう泣きてよめる。

かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとはこよひ定めよ

とよみてやりて、狩に出でぬ。

旧稿では、前半部のみを「泣く」という視点で捉えた。その結論として、時間が経過するに従い、①から③へと斎宮との一夜が現実のものとして確証が得られなくなり、さらに斎宮からも曖昧な歌を贈られ、激しく泣きながら歌を詠むという構成によって男の哀しみが描かれていたことを指摘した。六十九段の前半部は、このように曖昧となってしまった斎宮との一夜を嘆く男の姿が描かれている。

男の贈歌の五句目は、『古今集』では「世人定めよ」[6]とあるのであるが、このことについて片桐洋一氏は、「(六十九段の＊引用者注)後半部を増補することによって、後の展開をはかった段階において、「世人」を「今宵」と改めることになったのだと思うのである」と指摘されている[7]ように、後半

部では「こよひ定めよ」と、今夜へと望みをつないだ男の行く末が描かれている。

続けて後半部を見ていくこととする。

野に歩けど心はそらにて、①こよひだに人しづめて、いととく逢はむと思ふに、②国の守、斎宮の守かけたる、狩の使ありとききて、夜ひと夜酒飲みしければ、③もはらあひごともえせで、④明けば尾張の国へたちなむとすれば、男も人知れず血の涙を流せど、え逢はず。夜やうやう明けなむとするほどに、女がたより出す杯の皿に、歌を書きて出したり。とりて見れば、

かち人の渡れどぬれぬえにしあれば

と書きて、末はなし。その杯の皿に、続松の炭して歌の末を書きつく。

また逢坂の関は越えなむ

とて、明くれば、尾張の国へ越えにけり。

斎宮は水尾の御時、文徳天皇の御むすめ、惟喬の親王の妹。

「こよひ定めよ」に込められた男の思いは、今夜こそ人を静めて、早く斎宮に逢おうという部分（①）に表れている。しかし、「公務」の一環とでも言える国守の酒宴が一晩続いたことによって（②）、斎宮に逢いたいという思いは叶えられることがなかった（③）。夜が明ければ尾張の国へ向かわなければならない昔男にとって（④）、その夜は斎宮と逢う最後の機会であった。酒宴によって夜を過ごし、斎宮に逢うことができなかったその悲しみは、二重傍線部「血の涙を流せど、え逢はず」と描かれていることからもうかがうことができよう。

昔男は「狩の使」という公的な立場で伊勢に下っているため、国守からの接待には当然出席しなければならない。このことが、斎宮に逢いたいという男の願望を阻む要因となっているのである。狩の使として接待を受けるという「公務」の拘束力が大きいため、斎宮と逢う機会が阻まれているのであれば、この「公務」は男の願望を阻む障害として機能していると言えよう。このことは激しく泣く姿で閉じられる八十三段後半部にも見ることができる。以下、確認していくこととする。

八十三段は、前半部では、惟喬親王との主従関係を越えた関係が描かれている。その親王が突然出家してしまった驚きから後半部は始まる。

かくしつつまうで仕うまつりけるを、思ひのほかに、御髪おろし給うてけり。正月に拝みたてまつらむとて、小野にまうでたるに、比叡の山のふもとなれば、雪いとたかし。①しひて御室にまうでて拝みたてまつるに、つれづれと、いとものがなしくておはしましければ、やや久しくさぶらひて、いにしへのことなど思ひ出で聞えけり。②さてもさぶらひてしがなと思へど、公事どもあり

ければ、③えさぶらはで、夕暮にかへるとて、

忘れては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君を見むとは

とてなむ泣く泣く来にける。

惟喬親王の寂しい出家生活の様子を目の当たりにした昔男は（①）、そのまま惟喬親王のもとにいたいと思う（②）。しかし、男のその願望は「公事どもありければ」と公務があることによって叶わず（③）、そのまま夕暮れに帰ることとなるのである。惟喬親王のもとにいたいという気持ちが叶えられない男の哀しみは、最後の二重傍線部「泣く泣く」に表されていることは、旧稿で述べた通りである。

八十三段において、「公事」は男が惟喬親王のもとを離れなければならなくなった理由として描かれている。八十三段前半部に描かれた、通常の主従関係を越えた二人の間柄を併せて考えるに、惟喬親王のもとにいたいという男の気持ちは強いものと言える。太傍線部の「公事ども」が、惟喬親王のもとにいたい、という男の願望を阻む障害として機能していることは明確であろう。

六十九段後半部、八十三段後半部のように、「公務」によって男の願望が阻まれるということは、続く八十四段でも見ることができる。八十四段の本文を挙げて確認していくこととする。

むかし、男ありけり。身はいやしながら、母なむ宮なりける。その母、長岡といふところに住み給ひけり。子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さるに、十二月ばかりに、とみのこととて、御ふみあり。おどろきて見れば、歌あり。

老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まくほしき君かな

かの子、いたううち泣きてよめる。

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もといのる人の子のため

母子の情愛が描かれている章段である。母は長岡に、男は京にと別々に住んでいる。その男のもとに、ある日母から急ぎのこととして、死別を予感させる歌が届けられる。母との死別は、母を思う男にとって大きな悲しみであることは言うまでもあるまい。母を失うという大きな悲しみが、男の激しく泣く姿に表されていることは、旧稿で指摘した通りである。

この母子が思うように会えないのは、「京に宮仕へしければ」とあるように、公務が原因であり、宮仕えがあるから京を離れられず、母の住む長岡に行けない、というのである。また、『古今集』詞書には見られない「まうづとしけれど、しばしばえまうでず」という心情描写が見られる。[3] 母のもとを頻繁に訪れたいという男の願望が描かれることによって、初めて八十四段において「宮仕へ」という公務が障害として

機能していることがうかがえよう。

以上、男が激しく泣く姿が見られる章段において、男の側にその理由がある章段を全て見てきた。男の側に理由がある時、それは全て「公務」が障害となっていることを確認した。しかし、六十九段・八十三段・八十四段のいずれの章段においても、その大前提として、男の相手を思う心情が描かれている。その相手を思う心情が「公務」で身が拘束されることによって報われない状況となる、という物語構成がここには見られる。

八十四段に見られる「宮仕へ」の語は、他章段においてもいくつか見ることができる。それらの章段において「宮仕へ」はどのように機能しているのだろうか。次節以降で検討していくこととする。

二、惟喬親王章段における「宮仕へ」―八十五段―

『伊勢物語』には、公務を示す「宮仕へ」という語以外にも、貴人や帝に仕えることを「仕うまつる」という語で語る場合が八十五段・九十五段・九十八段・百三段に見られる。

むかし、二條の后に仕うまつる男ありけり。女の仕うまつるを、つねに見かはして、よばひわたりけり。「いかでものごしに対面して、おぼつかなく思ひつめたること、すこしはるかさむ」といひければ、女、いとしのびて、ものごしに逢ひにけり。物語などして、男、

彦星に恋はまさりぬ天の河へだつる関をいまはやめてよ

この歌にめでて、逢ひにけり。（九十五段）

むかし、おほきおほいまうちぎみと聞こゆる、おはしけり。仕うまつる男、九月ばかりに、梅のつくり枝に雉子をつけて、奉るとて、

わがたのむ君がためにと折る花はときしもわかぬ物にぞありける

とよみてたてまつりたりければ、いとかしこくをかしがり給ひて、使に禄たまへりけり。（九十八段）

むかし、男ありけり。いとまめにじちようにて、あだなる心なかりけり。深草の帝になむつかうまつりける。心あやまりやしたりけむ、親王たちの使ひ給ひける人をあひ言へりけり。さて、

寝ぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまさるかな

となむよみてやりける。さる歌のきたなげさよ。（百三段）

九十五段において、「二條の后に仕うまつる男」として昔男が登場している。しかしながら、「宮仕へ」の時とは異なり、「仕うまつる」ということは障害としても拘束力の表れとしても機能していない。二条の后のもとに仕えて、「女の仕うまつるを、つねに見かはして」と、女をいつも見る状況

であったからこそ、「この歌にめでて、逢ひにけり」という結末を迎えることが出来たと言える。男の詠歌のすばらしさが恋の成功を生んだことが描かれる章段であるが、そのきっかけとして「仕うまつる」ということが機能していると言えよう。

また、貴人のもとに仕える姿は九十八段にも見られる。男が詠んだ機知の歌と贈り物によって、良房はたいそう満足することが描かれており、九十五段同様、男の詠歌が成功を生んだといえる章段である。その良房から禄を賜るという成功を生んだきっかけとして、「仕うまつる」ということがここでも機能していることが確認できよう。

百三段では、「深草の帝」に仕えている。「親王たちの使ひける人をあひ言へりけり」と、愛し合ったことが描かれていること、また「さる歌のきたなげさよ」と言っている歌であるが、昨夜のことは夢のようであったという歌は後朝のものであり、男の恋が成就していることが示されている。ここでも、「仕うまつる」ということが恋の成功のきっかけとして機能している、と指摘できよう。

以上、九十五段、九十八段、百三段の用例から、貴人のもとに仕えることは、成功へとつながる出会いのきっかけであり、同じ「仕うまつる」であっても、単なる「仕うまつる」だけでは、「宮仕へ」のように障害として機能しないことが確認できる。

さて、前節で挙げた八十三段の後日談として描かれている八十五段には、「仕うまつる」と「宮仕へ」と、両方の語が見られる。そして、ここでも「仕うまつる」は障害として機能していないようである。本文を見ていくこととする。

むかし、男ありけり。わらはより仕うまつりける君、御髪おろし給うてけり。①正月にはかならずまうでけり。おほやけの宮仕へしければ、②常にはえまうでず。されど、もとの心うしなはでまうでけるになむありける。むかし仕うまつりし人、俗なる、禅師なる、あまたまゐり集りて、正月なればことだつとて、大御酒たまひけり。雪こぼすがごと降りて、ひねもすにやまず。みな人酔ひて、「雪に降り籠められたり」といふを題にて、歌ありけり。

③思へども身をしわけねばめかれせぬ雪のつもるぞ
　わが心なる

とよめりければ、親王いといたうあはれがり給うて、御衣ぬぎてたまへりけり。

「仕うまつる」ということは、障害として機能しないことは先に確認した通りである。八十五段においても、「仕うまつる」という語が見られるものの、それは、八十三段を承けてのものである。幼い頃から仕えていたからこそ、「正月にはかならずまうでけり」と、出家した親王のもとを訪れる口実として機能するのであり、ここでも「仕うまつる」という

ことは障害として機能していない。

八十五段の主題は「雪に降りこめられたり」という題詠であることが山本登朗氏によって指摘されている。[8]「雪に降りこめられた」という深刻な状況であるにもかかわらず、宮仕えに向かわなければならない昔男は、惟喬親王のことを思っても、身を分けることができないので、親王のもとを去らなければならないのである。「宮仕へ」は言い換えれば強い拘束力の現れなのである。前節で確認した六十九段、八十三段、八十四段においても、男の願望を阻む障害として「公務」が機能したのも、拘束力が強いためと言えよう。

以上、貴人に仕える男として描かれている章段を見てきた。九十五段、九十八段、百三段の三章段の例から、貴人に仕える時には、「仕うまつる」ということによって男の願望が叶えられていることを確認した。「仕うまつる」ということが障害として機能するのではなく、「宮仕へ」という語になった場合に、それは障害ないし拘束力の表れとして機能しているのである、と改めて言えよう。

「宮仕へ」の機能は単なる障害なのではなく、強い拘束力が結果的に障害として機能しているのである。「宮仕へ」という強い拘束力が生む障害は、男の願望を阻むものとして機能するのみでなく、女をもその悲劇の渦へと巻き込むのである。次節で見ていくこととする。

三、女の悲劇を生む「宮仕へ」―二十四段・六十段―

次に挙げる二十四段は、「梓弓」として知られる、女の悲劇が描かれた章段である。

むかし、男、かた田舎に住みけり。男、宮仕へしにとて、別れ惜しみてゆきにけるままに、三年こざりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に、こよひ逢はむとちぎりたりけるに、この男、来たりけり。「この戸あけ給へ」とたたきけれど、あけで、歌をなむよみていだしたりける。

あらたまの年の三年を待ちわびてただこよひこそ新枕すれ

といひいだしたりければ、

梓弓ま弓つき弓年を経てわがせしがごとうるはしみせよ

といひて、いなむとしければ、女、

梓弓ひけどひかねどむかしより心は君によりにしものを

といひけれど、男、かへりにけり。女、いとかなしくて、後にたちて追ひゆけど、え追ひつかで、清水のあるところにふしにけり。そこなりける岩に、およびの血して、書きつけける。

あひ思はでかれぬる人をとどめかねわが身はいまぞ

消えはてぬめる

と書きて、そこにいたづらになりにけり。

男を待ち続けることができず、別の男の人と一緒になろうと決心した晩に、男が宮仕えから戻ってくる。事情を知った男はそのまま立ち去って行き、追いかけるも追いつけず、女はついに死んでしまう。二十四段は女の不幸が描かれている章段である。

この女の不幸の直接の原因は、男を信じて待つことができなかったことである。しかし、それ以前に、男が「宮仕へ」によって女のもとを離れたことがそもそもの原因である。お互いが離れたくなかったことは、「別れ惜しみて」宮仕えへと向かったことが記されていることからもうかがえよう。二十四段の「宮仕へ」は、今西氏が「いわば悲劇の要因であった。」[10]と指摘される通りである。

宮仕えから戻ってきた男が立ち去っていった原因は、女が他の男と約束を交わしてしまったことにある。これが男女の関係の継続を阻んだ直接の原因であり、竹岡氏が「男は、浮気などしていたのではなく、心ならずも三年の間帰ることもできなかったと受け取るべきである。」と述べられているように[11]、この「宮仕へ」の語は、女の許へ逢いに行けない状況に男を置くものとして機能していることを読みとるべきであろう。「宮仕へ」によって男が拘束された結果、女は他の男と約束を交わしてしまい、最後には死という悲劇を迎えているのである。

前節までに見てきたように、二十四段においても「宮仕へ」は強い拘束力の現れであり、一緒にいたいと願う男女の願望を阻む障害として機能していることが確認できる。また、二十四段では、三年間男を待つことができなかった女を描くことにより、この「宮仕へ」による強い拘束力が、男にとっての障害となるばかりでなく、女にとっても悲劇を生むものとなっているのである。[12]

女の悲劇を生む「宮仕へ」は六十段にも見ることができる。六十段の本文を見ていくこととする。

むかし、男ありけり。①宮仕へいそがしく、②心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の国へいにけり。この男、③宇佐の使にて行きけるに、ある国の祗承の官人の妻にてなむあると聞きて、「④女あるじにかはらけとらせよ。さらずは飲まじ」といひければ、⑤かはらけ取りて出したりけるに、さかなとりける橘をとりて、

五月待つ花橘の香をかげばむかしの人の袖の香ぞする

といひけるにぞ、思ひ出でて、⑥尼になりて、山に入りてぞありける。

宮仕えが忙しく（①）、心を尽くすことができなかったこと（②）が、妻が昔男から離れていった原因として書かれて

いる。ここでも、「宮仕へ」による拘束力の強さが夫婦の仲を裂いた障害として機能していることが分かる。

この昔男が女と再会を果たすのは、宇佐の使としてある国に赴いた時である（③）。女は「ある国の祗承の官人の妻」という立場であるため、酒宴での接待の場に女主人として同席している。その女主人に向かって、公務として接待を受けている男は、自分の立場を知らせるために、傍線部④のような発言をする。歌によって、宇佐の使が元夫であったと知った女は、傍線部⑥のような悲劇を迎えるのである。六十段も二十四段同様、女の悲劇を描いた章段と言えよう。

傍線部①の「宮仕へ」が強い拘束力であって、その結果女との離別という障害を生むものとして描かれていることは、前節で確認した機能と同様である。ここで注目したいのは、「宇佐の使（③）」という公務で下った男が、傍線部④のような発言をして、公務には直接関わりのない女主人をも接待の場に同席させている（⑤）ことである。ここでも、「公務」が持つ強い拘束力は、男のみならず女をも、接待といういわば公務の一環とでもいうべき場に引きずり出させるほどの強いものである、と言えよう。

以上、二十四段・六十段と、男の「宮仕へ」に端を発した女の悲劇を描く二つの章段を見てきた。前節までに、「宮仕へ」は強い拘束力の現れとして機能していることを指摘したが、その強い拘束力は、男のみならず女にも障害を生むものであることが確認できよう。また、六十段のように、障害として機能するだけでなく、その強い拘束力は女に対しても働く場合もあるのである。

四、男女を拘束する「宮仕へ」―八十六段―

前節までは、明らかに男の行為としての「宮仕へ」の語が見られる章段を対象として見てきた。本節では、「宮仕へ」が男女のどちらをも指すように描かれている八十六段を見ていくこととする。

八十六段の本文は次の通りである。

むかし、いと若き男、若き女をあひ言へりけり。おのおの親ありければ、つつみていひさしてやみにけり。年ごろ経て女のもとに、なほ心ざし果たさむとや思ひけむ、男、歌をよみてやれりけり。

いままでに忘れぬ人は世にもあらじおのがさまざま年の経ぬれば

とてやみにけり。男も女もあひ離れぬ宮仕へになむいでにける。

たいそう若い頃は、お互いに親がいたので、その恋は終わってしまった。年月を経て、それでもやはり女に気持ちを伝えようと思ったのだろうか、男は歌を詠んで贈った。「今までに（昔のことを）忘れないでいる人はこの世にいないでしょう。お互いにそれぞれ年月を経てしまったので」という

歌で終わってしまった。男も女も「あひ離れぬ宮仕へ」に出ていたそうだ、とひとまず解釈できよう。

「あひ離れぬ宮仕へ」という言葉については、石田穣二氏が「男も女も、互いに相手を目にする同じ所に宮仕えにでていた（のでこうした歌を詠みおくった）のだった。」[13]と現代語訳されるように、お互いに同じ場所に仕えていたと解釈するのが主流である。しかし、「あひ離れぬ宮仕へ」をそのように解釈すると、男が女に歌を贈った理由として解釈できても、「とてやみにけり」の解釈が浮いてしまうように思われる。また、竹岡氏は、最後の一文について「今まで物語ってきた事柄について、物語者が読者向けに解説している文」[14]と述べられている。氏は、歌を贈った理由だけでなく、それっきりになってしまった理由を「あひ離れぬ宮仕へ」に求められている[15]ものの、やはり「とてやみにけり」となってしまったことへの説明が不充分であるように思われる。

では、「あひ離れぬ宮仕へ」をどのように解釈すべきなのだろうか。この章段からだけでは、「宮仕へ」の機能を捉えることは不可能であるように思われる。そこで、前節までに辿りみた「宮仕へ」の語の機能を八十六段に重ね合わせてみることとする。『伊勢物語』における「宮仕へ」の語は、強い拘束力を意味しており、物語においてはそれが障害として機能していること、また、二十四段・六十段のように、「宮仕へ」は男のみならず女をも拘束するものであったことを確認した。そのような「宮仕へ」の機能をここに重ね合わせてみると、「とてやみにけり」という強い拘束力から離れることが出来なかったためだ、と解釈することができるのではないだろうか。

以上、前節までに確認してきた「宮仕へ」の語の機能から、八十六段の「あひ離れぬ宮仕へ」を解釈してみた。八十六段のみを取り上げて「宮仕へ」の意味を考えることは困難であるが、それまでの「宮仕へ」の語の解釈を重ねることによって、男が歌を贈った理由、恋が終わってしまった理由は、男女ともに宮仕えに拘束されていたためだと解釈できるのである。また、このように考えることによって、「あひ離れぬ宮仕へ」が「とてやみにけり」となってしまった状況の説明をしていると解釈できるのである。八十六段においても「宮仕へ」という語は、まさに、二人の恋の成就を妨げる障害として機能していると言えよう。

おわりに

以上、『伊勢物語』中に繰り返し見られる、昔男の「宮仕へ」という語の機能を、個々の章段における主題との関わりを見定めつつ考察してきた。いずれの章段の場合も、「宮仕へ」の語は障害として機能しており、それは強い拘束力から由来するものであったことを確認した。「宮仕へ」という言葉は、単なる昔男の状況を説明するだけなのではなく、強い

拘束力を示すものとして、例えば八十六段の「あひ離れぬ宮仕へ」のように、一見必要のない章段にまで呼び込まれたと言えよう。

注

(1)拙稿「泣く昔男―『伊勢物語』の物語構成―」(『詞林』三十六号・二〇〇四年十月)

(2)『伊勢物語』全百二十五段中、激しく泣く昔男の姿は、四段・六段・二十一段・四十一段、六十九段・八十三段・八十四段に見られる。そのうち、男の側に理由があるものは、六十九段、八十三段、八十四段の三章段に絞られる。

(3)昔男に関わるものに限定した上で「宮仕へ」という語は、二十段、二十四段、六十段、八十四段、八十五段、八十六段、八十七段に見ることができる。なお、八十七段は「なま宮仕へ」となっているため、他の「宮仕へ」の語が見える章段と同じ扱いにはできないと判断し、本稿では扱わないこととする。

(4)竹岡正夫氏『伊勢物語全評釈』(右文書院・一九八七年)二十四段「宮づかへしにとて」項。

(5)今西祐一郎氏「「まめ男」の背景―『伊勢物語』試論―」(『伊勢物語―諸相と新見―』風間書房・一九九五年)

(6)『古今集』(巻十三・恋三・六四五・六四六)

業平朝臣の伊勢のくににまかりたりける時、斎宮なりける人にいとみそかにあひて又のあしたに人やるすべなくて思ひをりけるあひだに、女のもとよりおこせたりけるよみ人しらず

きみやこし我や行きけむおもほえず夢かうつつかねてかさめてか

返し　なりひらの朝臣

かきくらす心のやみに迷ひにき夢うつつとは世人さだめよ

(7)片桐洋一氏『古今和歌集全評釈』六四六番歌【鑑賞と評論】では、次のように述べられている。

(『伊勢物語』六十九段の＊引用者注)前半部の「君やこし我や行きけむ～」と「かきくらす心の闇に～」の贈答を中心とする場面は『古今集』と大きな違いがないのに対して、次の日「夜ひと夜酒飲みしければ、もはらあひごともえせで～」伊勢守兼斎宮頭主催の宴会に出席し、悲しい別れを前提に「かち人の渡れど濡れぬえにしあれば」「又あふ坂の関はこえなむ」という連歌を詠み合う場面は『古今集』には見られない。つまり、「かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとはこよひ定めよ」という本文は、この『古今集』になく『伊勢物語』だけにある「狩に出で」て、「野にありけど、心は空にて、こよひだに人しづめて、いととく逢はむと思ふに」という本文と呼応しているのであって、後半部を持たぬ『古今集』の本文としてはふさわしくないばかりか、『伊勢物語』の場合も、原初形態においては、『古今集』と同じく、前半部の「君やこし我や行きけむ～」と「かきくらす心の闇に～」という贈答部分しかなかったのに、後半部を増補することによって、後の展開をはかった段階において、「世人」を「今宵」と改めることになったのだと思うのである。

(8)『古今集』(巻十七・雑上・九〇〇・九〇一)

業平朝臣のははのみこ長岡にすみ侍りける時に、なりひ

ら宮づかへすとて時時もえまかりとぶらはず侍りければ、しはすばかりにははのみこのもとよりとみの事とてふみをもてまうできたり、あけて見ればことばはなくてありけるうた

よみ人しらず

老いぬればさらぬ別もありといへばいよいよ見まくほしき君かな

返し　　なりひらの朝臣

世中にさらぬ別のなくもがな千世もとなげく人のこのため

(9)山本登朗氏は「「雪に降りこめられた」状態は、本来苦しいものであったはずだが「帰りたくない」「帰らせたくない」という本心をひそませながら、あえて虚構的に「雪に降りこめられたり」という題を設定しているところに、この場の興趣の眼目がある、と考えられるのである」と指摘されている。(『伊勢物語と題詠―惟喬親王章段の世界―』『伊勢物語論　文体・主題・享受』笠間書院・二〇〇一年)

(10)注(5)参照。

(11)竹岡正夫氏『伊勢物語全評釈』(右文書院・一九八七年)二十四段「宮づかへしにとて」項。

(12)二十四段と同様に、男の宮仕えによって男女が離ればなれになってしまう話は二十段にも見られる。本文は次の通りである。

むかし、男、大和にある女を見てよばひて逢ひにけり。さてほど経て、宮仕へする人なりければ、かへりくる道に、三月ばかりに、かえでのもみぢの、いとおもしろきを折りて、女のもとに道よりいひやる。

君がため手折れる枝は春ながらかくこそ秋のもみぢしにけれ

とてやりたりければ、返ごとは京に来つきてなむもてきたりける。

いつの間にうつろふ色のつきぬらん君が里には春なかるらし

傍線部について、今西氏は(注(5)参照)「京の「男」が大和の女に会って再び帰京する。その理由は必ずしも「宮仕へ」と明示されなくてもよいのではないか。そのような所にまで「宮仕へ」が顔を出すのはなぜか。二十段だけを取り出して考えるかぎり、はかばかしい答えを引き出すのは困難に思われる。その困難さが幾分なりとも薄らぐのは、これまで見てきたような、「男」の「宮仕へ」を語る諸章段を念頭に置く場合、つまり、いくつかの章段によってかなり明確に打ち出されている「宮仕へ人」としての「男」の延長上に、二十段の「男」を置いてみる場合であろう。すでに形成されていた「宮仕へ人」としての「男」の一面が、さほどそれを必要としていない二十段にまで、「宮仕へ」という言葉を呼び込んだのではないだろうか。」と述べられている。二十段は二十四段と対照的に、男女の心情描写が見られないため、障害としての機能を認めることはできない。二十段における「宮仕へ」は、今西氏が指摘されているように他の章段によって打ち出されたものによって解釈すべきであろう。二十段の主題は、女の機知に富んだ返歌にあることは言うまでもない。その主題を妨げない男女が別れる理由として、「宮仕へ」の語が用いられていると考えられる。

(13)石田穣二氏訳注『新版伊勢物語』(角川書店・一九七九年)

(14)竹岡正夫氏『伊勢物語全評釈』(右文書院・一九八七年)八十六段「をとこも、女も、あひはなれぬ宮づかへになんいでにけ

る」項。

(15)「どうして今ごろにあって、男が女にこんな縁切り状同然の歌を送って、それっきりになってしまったかというと、実は男も女も、お互いに離れ去らない、つまり同じ御殿へ勤めに出ることになったからなのですよ、と説明しているのである」と述べられている。(注(14)参照)

*引用テキスト

『伊勢物語』新潮古典集成／『古今集』新編国歌大観

(きのした・みか　本学大学院博士後期課程)